

佐賀県文化財調査報告書第35集

# 石 木 遺 跡

昭和51年3月

佐賀県教育委員会

佐賀県教育庁文化課

# 正 誤 表

|      |      | 誤                                    | 正                                                  |
|------|------|--------------------------------------|----------------------------------------------------|
| 3 P  | 15行目 | 覺 <sup>カク</sup> 乱され                  | 攪 <sup>カク</sup> 乱され                                |
| 19 P | 11行目 | 土 <sup>ツ</sup> 生 <sup>セイ</sup> 遠跡    | 久 <sup>ク</sup> 蘇 <sup>ソ</sup> 遠跡                   |
| 19 P | 18行目 | 長 <sup>チガハ</sup> の背骨                 | 馬 <sup>ウマ</sup> の背骨                                |
| 19 P | 20行目 | の <sup>ノ</sup> ようなものを<br>全面に〜        | の <sup>ノ</sup> ようなものを通<br>したものであろう。<br>全面には〜       |
| 21 P | 5行目  | 袖 <sup>スリーブ</sup> 比                  | 抽 <sup>チュー</sup> 比                                 |
| 23 P | 22行目 | 柱 <sup>ハシ</sup> 目材 <sup>メゾウ</sup> から | 柱 <sup>ハシ</sup> 目材 <sup>メゾウ</sup> を                |
| 24 P | 3行目  | 国 <sup>クニ</sup> 指 <sup>サシ</sup> 史跡   | 国 <sup>クニ</sup> 指 <sup>サシ</sup> 定 <sup>テイ</sup> 史跡 |
| 24 P | 9行目  | 知 <sup>チ</sup> 見 <sup>ミ</sup> を      | 知 <sup>チ</sup> 見 <sup>ミ</sup> として                  |
| 24 P | 12行目 | 技 <sup>ギ</sup> 術 <sup>ジュツ</sup> の    | 技 <sup>ギ</sup> 術 <sup>ジュツ</sup> を                  |
| 24 P | 13行目 | 損 <sup>ソン</sup> 色 <sup>シキ</sup>      | 遜 <sup>ソン</sup> 色 <sup>シキ</sup>                    |
| 24 P | 17行目 | 数 <sup>スウ</sup> 々に                   | 数 <sup>スウ</sup> 々の                                 |

# 石 木 遺 跡

昭 和 5 1 年 3 月

佐 賀 県 教 育 委 員 会

## は　じ　め　に

この報告書は、佐賀県教育委員会が佐賀中部農林事務所の依頼を受けて、昭和49年12月から昭和50年3月にかけて実施した、圃場整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査の記録であります。

今回は公有水路予定地の二個所の発掘調査であり、遺跡の全貌を明らかにすることは出来なかったのですが、貴重な資料の出土をみました。発掘調査の記録としては決して満足のゆくものではありませんが、本報告書が古代史の一端を知る資料として、いくらかでもお役にたてば幸いです。

なお、調査に対してご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位の方々に心からの感謝を申し上げます。

昭和51年3月31日

佐賀県教育委員会

教育長　瀬戸口　芳夫

# 目 次

|                  |    |
|------------------|----|
| I 発掘調査の経過 .....  | 1  |
| 1. 概 要 .....     | 1  |
| 2. 発掘調査日誌 .....  | 2  |
| II 遺 跡 .....     | 4  |
| 1. 遺跡の状況 .....   | 4  |
| 2. 遺 構 .....     | 7  |
| A. A地区遺構 .....   | 7  |
| B. B地区遺構 .....   | 9  |
| III 遺 物 .....    | 10 |
| 1. 古墳時代の遺物 ..... | 10 |
| A. 土師器 .....     | 10 |
| B. 須恵器 .....     | 13 |
| C. 木製品 .....     | 14 |
| D. 土製品・石製品 ..... | 19 |
| 2. 平安時代の遺物 ..... | 23 |
| 3. 弥生時代の遺物 ..... | 23 |
| IV ま と め .....   | 24 |
| 図 版 .....        | 27 |

# 挿 図 目 次

|        |                               |    |
|--------|-------------------------------|----|
| 第 1 図  | 石 木 遺 跡 位 置 図 .....           | 5  |
| 第 2 図  | 発 掘 区 位 置 図 .....             | 6  |
| 第 3 図  | 堰 実 測 図 .....                 | 8  |
| 第 4 図  | SE 004 井 戸 実 測 図 .....        | 9  |
| 第 5 図  | 石 木 出 土 土 器 実 測 図 .....       | 11 |
| 第 6 図  | 石 木 遺 跡 出 土 土 器 実 測 図 .....   | 13 |
| 第 7 図  | 木 製 品 実 測 図 ( そ の 1 ) .....   | 15 |
| 第 8 図  | 木 製 品 実 測 図 .....             | 17 |
| 第 9 図  | 木 製 鞍 橋 実 測 図 .....           | 18 |
| 第 10 図 | 子 持 勾 玉 実 測 図 .....           | 20 |
| 第 11 図 | 船 形 木 製 品 .....               | 21 |
| 第 12 図 | 祭 祀 用 土 製 品 実 測 図 .....       | 22 |
| 図 面 1  | 石 木 遺 跡 A 地 区 遺 構 配 置 図 ..... | 25 |

# I 発掘調査の経過

## 1. 概要

石木遺跡一帯は、土生・久蘇遺跡の発掘調査が行われた昭和46年頃から、出土遺物の豊富さと木器類の残存状態の良好なことなどから注目されるようになった。

近年、大型圃場整備事業が各地で計画実施されて来ているが、三日月町においても年次計画に基づき工事が着工されていた。その公有水路敷の中に土器片が散乱している旨県教委に連絡があり、早速予備調査を実施したところ遺物の包含層が確認された。そこで、工事の施行を延期し、事前の発掘調査を実施することになった。

発掘調査は、佐賀県が事業主体となり、圃場整備の事業費 300万円で行われることになった。調査は、石木遺跡調査委員会（瀬戸口芳夫委員長―県教育長）を組織し、その指導のもとに、昭和49年12月20日から昭和50年3月5日にわたって実施した。

発掘調査は、公有水路敷予定地二箇所を実施し、馬具・子持勾玉など多数の遺物の出土があり、予期以上の成果をあげることが出来た。

### 発掘調査組織

|      |      |       |            |
|------|------|-------|------------|
| ①委員会 | 委員長  | 瀬戸口芳夫 | 佐賀県教育長     |
|      | 委員   | 鏡山 猛  | 県文化財専門委員   |
|      | 〃    | 七田 忠志 | 〃          |
|      | 〃    | 岡崎 敬  | 〃          |
|      | 〃    | 小田富士雄 | 〃          |
|      | 〃    | 堤 敏一  | 三日月町教育長    |
| ②事務局 | 局長   | 田中寿義雄 | 県文化課課長     |
|      | 次長   | 平山政己  | 〃 課長補佐     |
|      | 庶務   | 百武定弘  | 〃 庶務係長     |
|      | 〃    | 中野安正  | 〃 庶務係      |
|      | 〃    | 草野 優  | 三日月町教委主事   |
| ③調査員 | 調査総括 | 木下之治  | 県文化課文化財調査監 |
|      | 調査主任 | 高島忠平  | 〃 文化財調査係長  |
|      | 調査員  | 樋渡敏暲  | 〃 文化財調査係   |
|      | 〃    | 佛坂勝男  | 〃 〃        |

## 2. 発掘調査日誌

○発掘調査：昭和49年12月20日～昭和50年3月5日

- 12・20 発掘区設定，東南端を基点AE11とし4mごとのグリットを設定する。表土除去開始。
- 12・21 関係者の調整で本日鍬入式。表土除去，南北溝3条検出，溝間9mあり。
- 12・23 AE28までの遺構の検出，ピット多し，ピット中より柱根らしきものの検出。土師器片多数出土。
- 12・24 AE31まで表土除去。ピット中に柱根らしき木質状のものが残存しているのを検出する。住居趾か？
- 12・25 AE43まで表土除去，AE40～AE41に溝状の遺構あり。溝は浅く底部のみ残存。
- 12・26 AE45まで表土除去し遺構の検出を行う。斜行する溝を検出。黒色層より弥生式土器出土。
- 12・27 AE48まで表土除去し遺構の検出を行う。土師器片多く出土。
- 12・28～1・9 年末・年始のため作業中止。
- 1・10 雨天続きのため発掘地区内満水。排水作業。
- 1・11 AE30～AE43まで乾いた地点の遺構検出，AE30～31に暗褐色の砂礫層があるが遺物包含せず，AE43の巾20cmの溝中より土師片出土。
- 1・13 AE47～49の表土除去。寒気強し。
- 1・14 AE47附近から西へ水分多く粘土層で作業難行する。
- 1・16 雨天のため出土物水洗い。
- 1・17 AE50～56（最終区）までの北半分を掘り下げる。土師器・須恵器多数出土。粘土質でかなり作業がてまどる。小雪。
- 1・18 雪のため作業中止。
- 1・20 AE48～50まで発掘続行。黒色の遺物包含層が西へ厚みを増し傾斜している。水のため，午後よりB地区の発掘区をBN1～8までのグリットを設定する。表土除去，弥生式土器片出土。
- 1・21 B地区表土除去続行。既水路のため湧水。
- 1・22 雨天。土器洗い。
- 1・23 昨夜の雨のため発掘作業中止。土器洗い。
- 1・24 A地区に戻りAE50～53まで粘土層を一段下げる。沼か川状のようである。
- 1・25 昨夜の雨のため土器洗い。

- 1・27 水の汲み出し、粘土層の中より立木の根が検出される。その下層より土器片が出土する。
- 1・28 AE49～51の発掘を行う。完型に近い土器が多数出土する。木器出土をはじめる。
- 1・29 先日の作業続行。湧水で作業にてまどる。子持勾玉出土。不明木器多数出土。
- 1・30 写真撮影。
- 1・31 B地区発掘作業再開。湧水にそなえてポンプを固定する。
- 2・1 雨天。室内作業。
- 2・3 雨天のため、土器の水洗いをするが、干す場所なく、大坪玉氏の車庫を借りる。
- 2・4 よく雨が続く。水洗いと記名を行う。
- 2・5～2・9 雨天のため作業中止。
- 2・10 B地区の北側の表土除去。
- 2・11 B地区黒色粘土層の掘込み。
- 2・12 B地区続行。東側は攪乱され、江戸期のものと推定される塗物・下駄が出土。中央部より、盤と思われる木器出土。
- 2・13 B地区写真撮影・測量実測。
- 2・14 A地区遺方測量のための杭打ち。
- 2・15～2・27 写真撮影・実測
- 2・28 補足調査
- 3・1～3・5 出土品整理
- 3・22～3・25 石木遺跡出土品展示会。

## Ⅱ 遺 跡

### 1. 遺跡の状況

石木遺跡は、佐賀県小城郡三日月町大字石木にある。この遺跡は、佐賀平野の西北端に所在し、北側に脊振山地の屋根の一つである天山(1,046m)が聳えている。脊振山地は、佐賀県のほぼ中央を横切っており、東から西へ延びて天山となる。天山の南麓から平野部にかけてはかなりの傾斜の扇状地が発達し、山裾から約1kmで佐賀平野となる。

脊振山地は全山ほとんど花崗岩からできている。つまり、中世代に古生層山地の下から隆起したもので、その山頂部は、次第に浸食されて準平原となり、平坦部分が広く残っている。そのため山間の往来も比較的容易で、居住にも適しているのも、人類が早くから住みついていたと思われる。なかでも、古生層が浸食に耐え孤高の山容を示している雷山や、天山は、古くから民間信仰の対象とされてきた。このことは、石木遺跡との<sup>注1</sup>関連が推察される。

この天山に源を発し、南へ流れ出る水系には、晴気川と祇園川があり、これら両河川の中間を勝川が走っている。晴気川は、晴田地区、三里地区を通り多久川と合流し、牛津川・六角川となり有明海に注いでいる。祇園川は三日月町を通り嘉瀬川へ合流し有明海に至っている。この両川の中間を畑田・砂田・一の坪・轡ヶ里・久蘇部落を通して牛津川に注ぐ勝川が流れている。この勝川小水系にそって弥生時代の遺跡である土生遺跡<sup>注2</sup>や弥生時代から古墳時代の遺跡である久蘇遺跡がある。石木遺跡も、この勝川の東側に<sup>注3</sup>接し、標高約5mの水田にあり、北へ約2kmで小城町に至る。

このような脊振山地の南斜面より佐賀平野へと開ける一帯が、先土器時代から今日まで当地の生活の舞台となってきている。しかし三日月町周辺の埋蔵文化財については調査事例など多いとはいえ実体はわからないところが多い。今後の踏査・調査が大いに期待されるものである。

次に、この地区周辺の遺跡について概述してみる。

先土器時代の遺跡としては、昭和35年に、日本考古学協会西北九州総合調査特別委員会により発掘調査が行われた多久市の三年山先土器遺跡・茶園原先土器遺跡がある。その他、ポイントやブレイドなどが採集された地区が多久市西北部を中心に広がっている。これらは鬼の鼻山周辺に産するサヌカイトを使用した石器である。その分布が背振南山麓を東へ伸びて、三日月町東分下古賀・犬塚山・老松山・地藏山・彦島・岡本などで採集されている。これらはまだ未調査・未整理のため詳細は不明であるが、先土器時代の



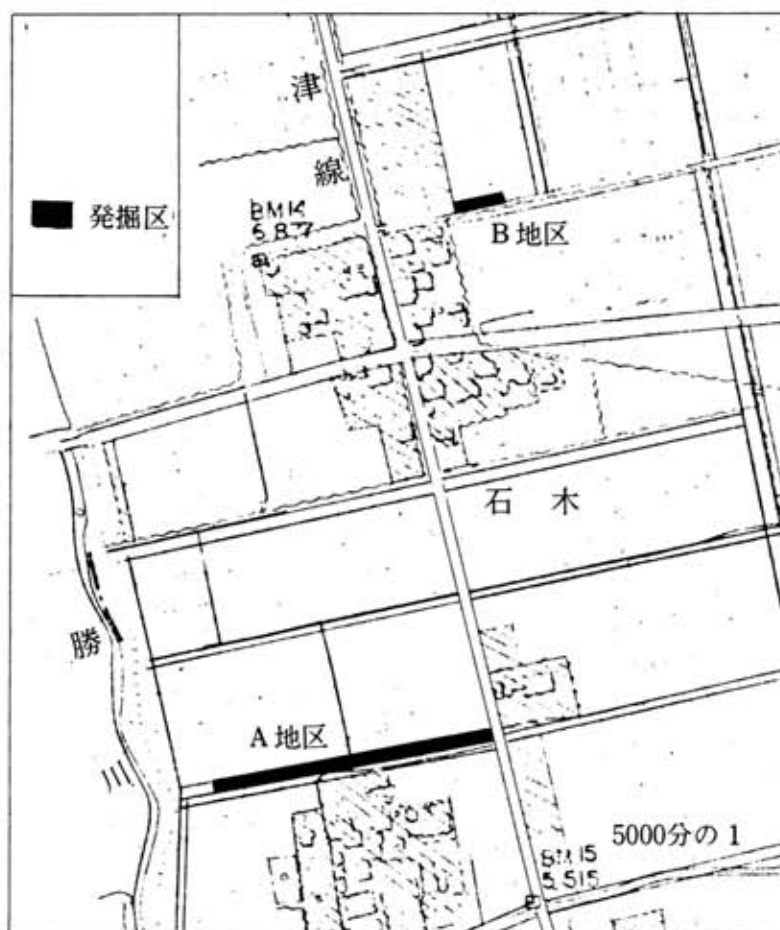
第1図 石 木 遺 跡 位 置 図

解明のため調査が待たれる地域であるといえよう。

縄文時代の遺跡としては、昭和33年6月と昭和34年3月との二回の発掘調査が行われた竜王縄文遺跡がある。縄文早期から晩期までの土器が出土している。また、石木遺跡より東北へ約 1.5kmの佐織遺跡・三日月中学校校庭からは夜臼式土器が出土している。

板付Ⅰ式土器と共伴するといわれる夜臼式土器の単純出土は注目されるところであるが、詳細な遺構等については不明である。弥生時代の遺跡としては、多久市牟田辺遺跡・小城町三里小学校前の低い丘陵・晴田小学校の校庭やその東側の水田地帯から中期の甕棺群が出土している。これらは低丘陵上の先端部で、水田を臨む所に位置している。

また、石木遺跡の北約 200m、石木部落に隣接する土生遺跡東方の二俣遺跡からは、中期の住居跡や多数の木器類が出土し、土生遺跡は昭和48年に国指定史跡となった。この地帯は、弥生時代における汀線として推定されるところから約3km北に位置している。このため古くから水田農耕に適していたと考えられる。しかし、弥生時代の各遺跡についても今後の調査に期待するところが大きいといえる。



第2図 発掘区位置図

古墳時代の遺跡としては、三日月町には、地藏山・姫塚・椎見山・西野西方二号墳、小城町には茶釜塚・宮戸山など佐賀平野西端の前方後円墳地帯を形成している。また山麓には後期の群集墳が多く、コウザン山・一本松・鏡山・山崎山・牛尾山古墳群などがある。これらはミカン園造成のため、大部分が破壊されているが、古墳時代の解明にとっては貴重なものであるといえよう。

歴史時代の遺跡としては、条理制の遺構が残っているが、これらも圃場整備事業のため字名などにのみ痕跡をとどめている状態である。

また、石木遺跡より北方約3kmの小城町寺浦には、寺浦廃寺（晴気廃寺）があり、奈良時代の瓦を出土し、塔心礎石等が残っている。なお、多くの遺跡が眠っていると推定されるが、個々の遺跡の解明と同時に、相互的な関連した遺跡の究明が必要であり、綿密な分布状態の調査・踏査が待たれるところである。

## 2. 遺 構

発掘調査は、県道牛津～小城に沿った石木部落の南側集落の北側の水路予定地に上記県道と直角方向に幅4メートル、長さ183メートルの東西方向に長い発掘区（A地区）を設けて行った。また石木部落の北接する国指定史跡土生遺跡の東に接して東西に長い発掘区（B地区）を設けた。

### A. A地区の遺構

この地区の土層は青灰色粘土層が地山で、その上に暗褐色土、耕作土の順に堆積しており、遺構のほとんどは青灰色粘土層上面で検出された。一部の遺構は暗褐色土層の厚い所があり、同層下部の黒褐色土上面から検出された。青灰色粘土層は一部で砂質をおびる部分があり、地山の土質は必ずしも一様ではない。なお発掘区中央部は表土直下が地山層で、後世に削平されており、この部分での遺構の残りは良くない。この地域は現在は一面平坦であるが、かつてはゆるやかな起伏をもった地形であったとみられる。

検出された主な遺構は掘立柱建物1棟、溝8条、井戸6基、土壇、川1条、堰1、小穴群などである。

遺構の配置は発掘区東側に南北方向の溝3条が平行して走り、その西側に平安時代の井戸群、発掘区中央部は掘立柱建物と小穴群、発掘区西側には斜行する溝5条と土壇および小穴群で発掘区西端には川と堰がある。

#### SD001・002・003 南北溝（図面1・図版4-1・2）

調査区東側に南北に平行して走る溝で、いずれも南北両端は調査区外へのびている。SD001は幅約70センチメートル・深さ30センチメートルあって、横断面が逆梯形をなす。埋土は黒褐色土で、遺物は若干の弥生土器小片のほかは検出できなかった。SD002は幅50センチメートル、深さ約25センチメートルあって、横断面が逆梯形をなす。埋土は黒褐色粘質土で、遺物は平安時代とみられる土器片が検出された。この溝はSD001・003にくらべて方位が北側でやや西にふれている。SD003は幅約120センチメートル・深さ約25センチメートルあって、横断面は皿状を呈する。西岸はやや蛇行する。埋土は下から砂まじり黒褐色土、砂まじり暗褐色土、黒緑色土の順に堆積している。黒褐色土に平安時代と思われる土器片が検出されている。

#### SE004 井戸（第4図、図版3-1・2）

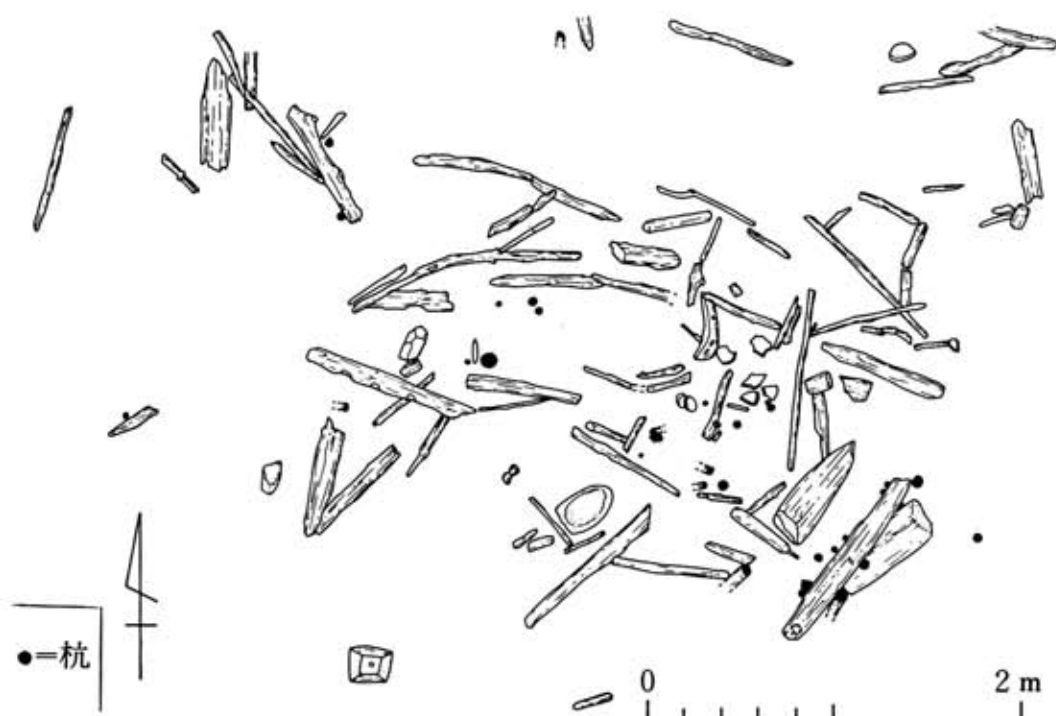
くりぬいた丸木を枠にしたもので、最大径0.53メートル、現存高0.77メートル、厚1～2センチメートルあり、桧を材にしていると思われる。井戸の掘形は径1.35メー

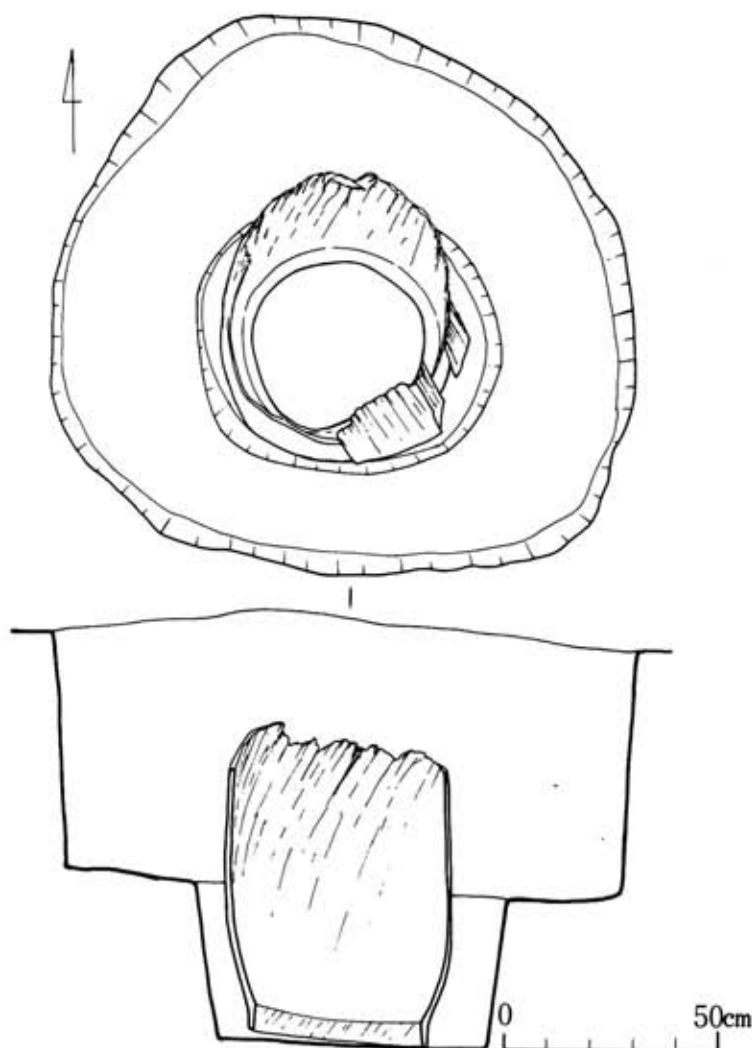
トル、深さ0.95メートルあり、二段に掘っており、段の高さは底から約0.35メートルある。井戸枠中には黒褐色の粘土が堆積しており、堆積土中より、平安時代の土師器・須恵器・箆・櫛が出土している。掘形の埋土は褐色の粘質土である。井戸はこの他に5カ所がSE004付近に円形ないし楕円形の土壌が散在するが、いずれも井戸枠が残存しておらず可能性を指摘するにすぎない。あるいは貯蔵穴とも考えられるが、性格は不明である。

# **SB005〈掘立柱建物〉** (図面1, 図版2-1・2)

発掘区中央部に小穴群がある。柱穴と思われるが、建物としてまとまるのはSB005だけである。いずれも柱根が残存しており、中には沈下を防ぐ礎板の存在するものがある。SB005は、べた柱の建物で、発掘区内で東西2間×南北1間を検出している。南北が2間以上かどうかは発掘範囲が限られたため不明である。柱間は東西行が1.90メートル、南北行が2.50メートルである。SB005は柱穴から平安時代の須恵器片が検出されており、平安時代以降の建物跡と考えられる。

発掘区西側で、川跡と東側一帯には斜行する何条かの溝と小穴があるが、発掘区が小範囲なため性格が不明である。出土遺物からみて6世紀後半の遺構とみられるが、後述する川跡及び堰と同時代の集落ないし住居関係の遺構とみられる。





第4図 SE 004 井戸実測図

たか不明であるが、直径10~15cm、長さ1メートルを超える杭がこの附近に散在しており、このような杭は古照遺跡<sup>注7</sup>の堰跡に例があるところから、打ちこみ杭を中にして長い棒状の杭を合掌に組んだ堰の構造が考えられる。多量の遺物は川がこの堰でせき止められた関係から遺物が集中的に堆積したためであろう。

## B. B地区の遺構

この地区は国指定史跡土生遺跡の東側に接して東西方向に水路が計画されたため、その部分の発掘調査を実施したものであるが、この部分は沼状の黒色土の堆積を確認したに過ぎず、他に見るべき遺構は検出できなかった。遺物は、弥生土器片が黒色土中に散見され、沼の底から後述の木製品（図版8—6）が出土した。

## SX006 川及び堰

（第3図・図版5・6・7）

発掘区に対して北東から南西に向けて斜めに横切る幅約11.5メートル、深さ0.85メートルの川跡とそこに築かれた堰である。川跡は上部から黒褐色・暗褐色・暗灰色砂質土の順に堆積しており、暗褐色、暗灰色砂質土から土器及び木製品等が多量に含まれていた。堰はこの川に直交する形で南東から北西に向けてほぼ2列の杭が走っている。東側岸付近は杭が丸材や板を固定するためうちこまれた施設（図版8—3）がある。堰は杭とともにどのように構築されていた

# III 遺 物

出土した主な遺物は弥生土器・土師器・須恵器などの土器類・土製品・木製品などである。弥生土器は中期初頃の土壌で一括がみられたほか、暗褐色の包含層中に散見されたに過ぎない。ほかの遺物は平安時代の井戸（SE004）や古墳時代の川及び堰跡（SX006）から主として検出されており、ここではこれらの遺物を中心に紹介したい。

## 1. 古墳時代の遺物（SX006出土）

### A. 土師器（第5図・図版9・10—7）

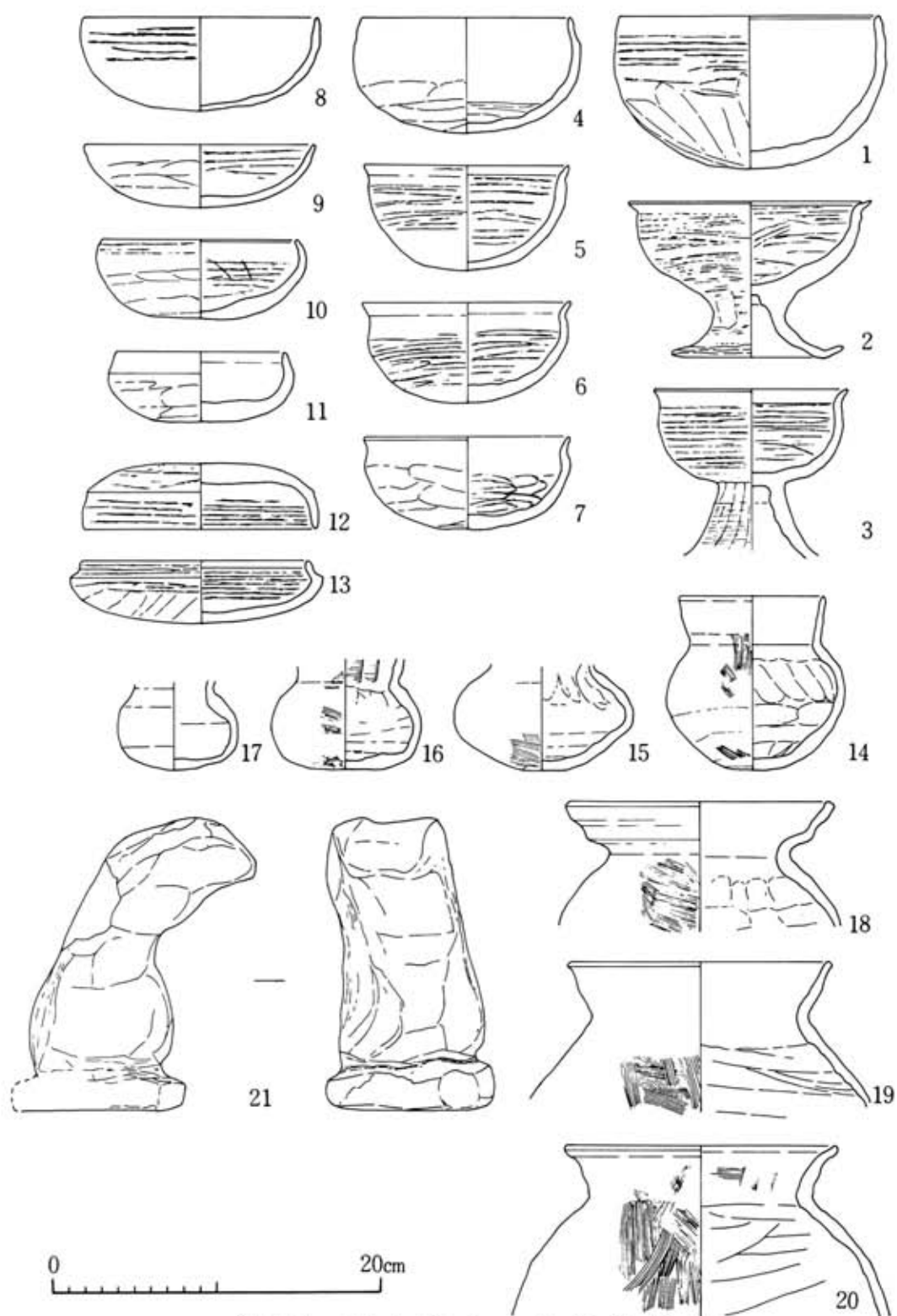
**椀AⅠ**（第5図8） 丸底に内弯気味に開く口縁部のつく形態である。口縁上端はややとがっている。口縁部外面は横ナデ、底部外面は一方向にヘラ削りを行っている。内面はナデで調整している。胎土は灰褐色を呈し、小砂粒を含んでいる。口径14.3センチメートル、高さ 5.8センチメートル。

**椀AⅡ**（第5図9，図版9—3） 丸底に内弯気味に開く口縁部のつく形態で、椀AⅠより浅い器形である。口縁上端は椀AⅠ同様とがっている。器内外面の調整はAⅠと同様であるが、ヘラ削りが口縁部までおよんでいる。胎土は赤褐色で小砂粒を含んでいる。口径14.0センチメートル、高さ 3.9センチメートル。

**椀B**（第5図10・11，図版9—2・5） 不安定な平底に内弯する口縁部のつく形態である。口縁上端は丸くしている。器外面は口縁上半は横ナデ・口縁下半はヘラ削り、底部は磨滅のためよく判らない。内面は横ナデであるが、横ナデ以前のヘラの当りがある。胎土はいずれも赤褐色で、砂粒を含んでいる。10は上記の調整のあと全面にヘラ磨きを行っている。器面は黒色を呈する。胎土は赤褐色で砂粒を含んでいる。11は10に比べて粗製である。10は口径11.8センチメートル、高さ 5.0センチメートル。11は口径10.1センチメートル、高ち 4.4センチメートル。

**椀C**（第5図5・6・7，図版9—1・7・8） 丸底に内弯気味の口縁部がつき、口縁端部が外反する形態である。口縁上端はとがっている。器面外側は口縁部が横ナデ、底部がヘラ削りされている。内面は刷毛目の土をナデで調整している。5と6は器面底部外面をのぞいて全面にヘラ磨きが施されている。胎土はいずれも赤褐色で、砂粒を含んでいる。5は口径12.5センチメートル、高さ 6.5センチメートル、6は口径12.7センチメートル、高さ 6.2センチメートル。7は口径12.5センチメートル、高さ 5.7センチメートル。

**鉢**（第5図1・4，図版9—6） 丸底に内弯する口縁部のつく形態で、口縁上端は



第5図 石木出土土器実測図

やや丸くしている。器面外側は底部から口縁部にかけてヘラ削り、口縁部上半から内側にかけては横ナデしたあと横方向にヘラ磨きを施している。ヘラ磨きは内側が外側に比べて細く施されている。胎土は赤褐色で砂粒を含んでいる。4は口径12.8センチメートル、高さ7.0センチメートル。1は口径15.8センチメートル、高さ9.4センチメートル。

**高坏**（第5図2・3，図版9—9） 裾のはね広がる短い脚台に内弯気味の端部に外反する縁部のある坏部がつく形態である。坏部は内外面ともナデのあと横方向にたんねんにヘラ磨きが施されている。脚台部は脚部をたて方向にヘラで面取りした後、たんねんにヘラ磨きが施されている。胎土は赤褐色で、砂粒を含んでいる。2は口径14.8センチメートル、高さ9.6センチメートル。

**蓋坏**（第5図12・13，図版9—4） 須恵器の蓋坏を模したもので、坏は丸底に内傾する口縁部（たちあがり）のつく形態で、蓋は丸い天井部にやや外へ開く縁部のつく形態である。坏の口縁上端は丸く、蓋の縁端はとがっている。蓋は天井部外面をヘラ削り、ほかの器面はナデで調整し、さらに全面にヘラ磨きをしており、器面は黒色で磨研土器の様を呈する。坏は底部外面をヘラ削り、ほかの器面はナデで調整し、さらに全面をヘラ磨きをしており、器面は黒色で、黒色磨研土器の様を呈する。胎土は茶褐色で砂粒を含んでいる。蓋は径14.2センチメートル、高さ4.0センチメートル。坏は口径13.6センチメートル、高さ3.8センチメートル。

**埴**（第5図14～17，図版9—10） やや扁平な球形の体部に外反する口縁部のつく形態である。外面は刷毛やナデで調整している。内面は体部は指先きで粘土を強くナデた痕跡がよく残っており、口縁部は軽いナデと刷毛目の調整が認められる。胎土はいずれも茶褐色で砂粒を含んでいる。14は口径8.8センチメートル、高さ10.6センチメートル。

**甕A**（第5図18） 卵形の体部に屈曲しながら開く口縁部のつく形態である。口縁部から頸部にかけて横ナデ、体部外面は斜め方向の刷毛目の上を軽く横ナデしている。体部内面は横方向のヘラ削りの痕跡が明瞭である。胎土は赤褐色で金雲母片・砂粒を含んでいる。体部下半は欠失している。口径16.4センチメートル。

**甕B**（第5図19・20） 卵形の体部に外反する口縁部のつく形態である。口縁部は刷毛のあとといねいに横ナデしている。一部には口縁部内外面に横方向、ないし縦方向の刷毛目が残っているものがある。体部外面は縦方向の刷毛目が施されており、口頸部は横ナデである。体部内面は横方向のヘラ削りが良く残っている。胎土は茶褐色で砂粒を含んでいる。19は口径16.1センチメートル、20は口径16.6センチメートル。

**支脚**（第5図21，図版10—7） 烏帽子形をなす形態で、裾部が他と区別して造り出されている。器面は粗くナデツケられ面をなしている。胎土は暗褐色で砂粒を含む。器高は18.0センチメートル。

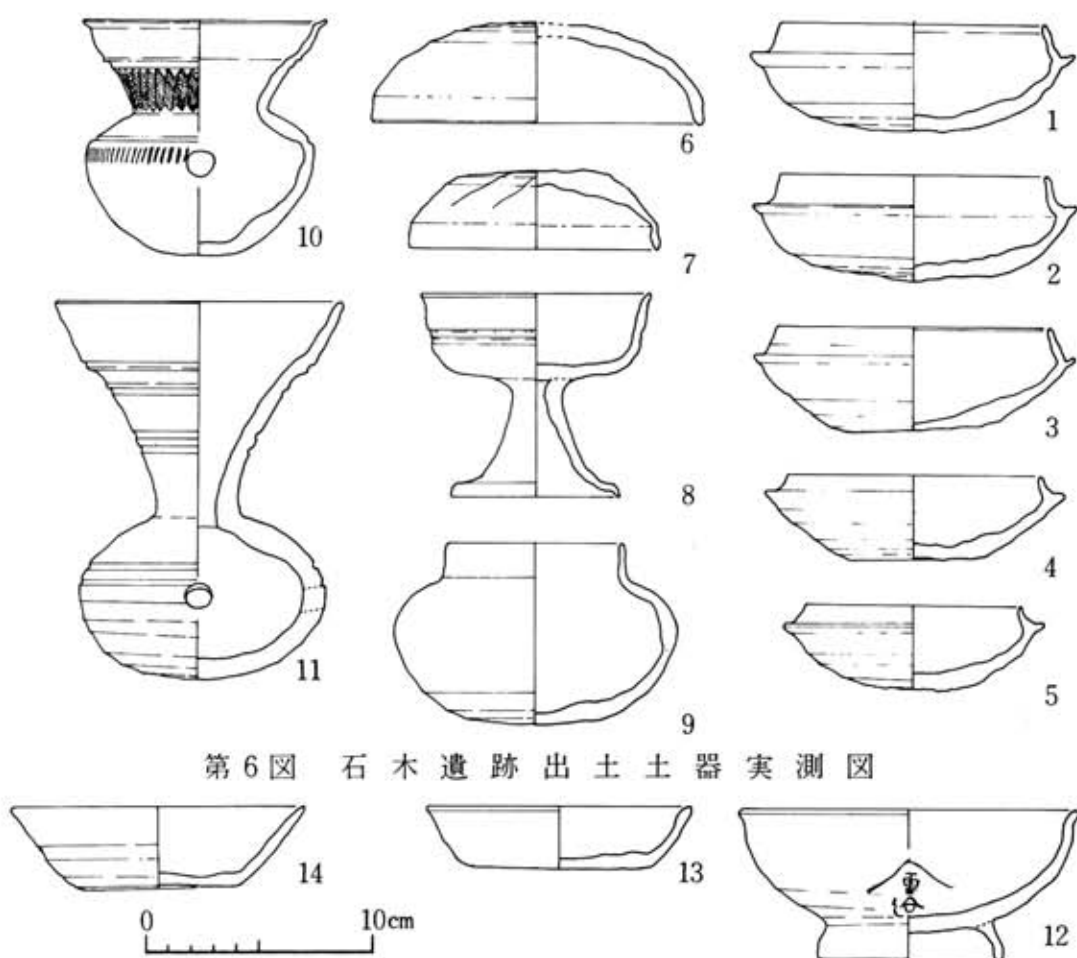
## B. 須恵器 (第6図・図版10)

### 蓋坏 (第6図1～7, 図版10—1～4)

坏Ⅰ (第6図1～3・図版10—3・4) 丸い底部に内傾する口縁部 (たちあがり) のつく形態である。上端は丸くしている。口縁部から底部にかけてロクロによる横ナデが、内面底部は一方向のナデが、底部下半はロクロの回転を利用したヘラ削りが施されている。胎土は暗青灰色で砂粒を含んでいる。1は口径11.6センチメートル、高さ4.7センチメートル。

坏Ⅱ (第6図4・5, 図版10—2) 大小ある。平底気味の丸底に内傾する短い口縁部のつく形態である。口縁上端はとがっている。口縁部から底部にかけてロクロによる横ナデ、内面底部は不定向のナデ、底部外面下半部はロクロの回転を利用したヘラ削りで調整されている。胎土は暗青灰色で、砂粒を含んでいる。5は口径11.2センチメートル、高さ4.5センチメートル。

蓋 (第6図6・7, 図版10—1) 大小ある。丸い天井部にやや外へ開く縁部のつく形態である。縁端は丸くなっている。天井部はヘラ切り離し痕が残っておりその縁部



第6図 石木遺跡出土土器実測図

を仕上げのヘラ削りをしている。その他底部から縁部、内面にかけてはロクロによる横ナデで調整されている。胎土は青灰色で砂粒を含んでいる。7は天井部外面に同一起点から三本の線をひいたヘラ記号がある。6は縁径14.6センチメートル。高さ4.4センチメートル。

**高坏**（第6図8，図版10—5） 裾広がりの脚部にやや外傾する口縁部のある坏部がつく形態である。坏部は内外面ともロクロによる横ナデ，脚部は外面ロクロによる横ナデ，内面にはしぼり目が残っている。胎土は暗茶褐色で，砂粒を含んでいる。口径10.1センチメートル，高さ9.0センチメートル。

**柑**（第6図9） やや偏平な球形の体部に直口の短い口縁部のつく形態である。口縁上端は丸くしている。底部外面をのぞく器面はロクロに横ナデの調整である。底部外面はロクロの回転を利用したヘラ削りで調整されている。胎土は青灰色で，砂粒を含んでいる。口径7.9センチメートル，高さ（復原）8.0センチメートル。

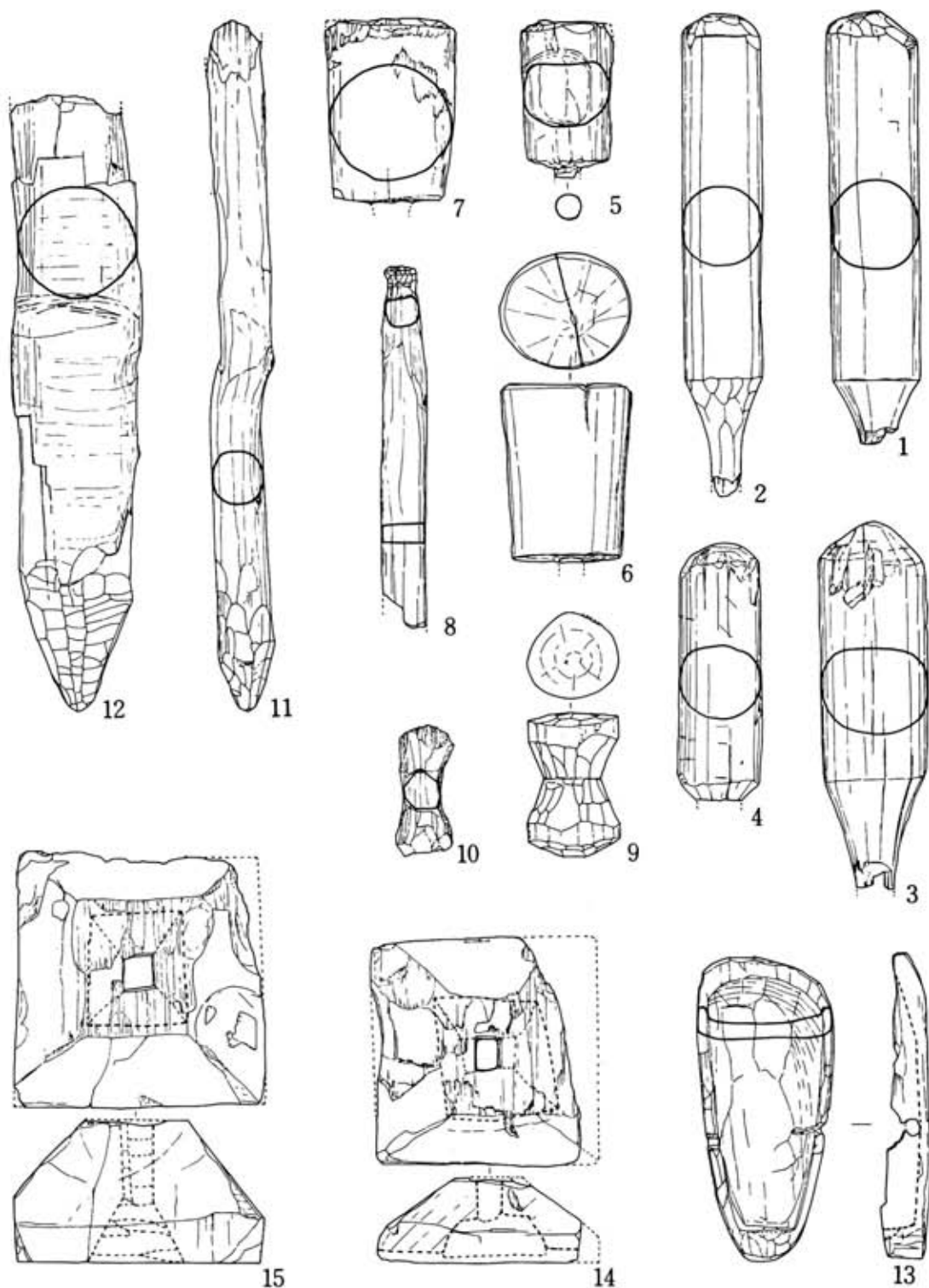
**線**（第6図10・11，図版10—6・8） やや偏平な球形の体部に大きく開く口縁部のつく形態である。体部に一孔がある。10は11に比べて口縁部が短く，頸部が太く，口縁端部が鋭く外反している。口頸部外面には櫛目による波状文，体部に櫛目による刺突文帯がある。口縁部体部上半はロクロによるナデ，体部下半は削りのあとナデつけている。暗青灰色で砂粒を含んでいる。なお体部上面に焼成の際，灰かぶりによる，白色の自然釉が認められる。11は頸部が細く，口縁が大きく開いている。頸部内面にしぼり目がある。調整は10と同様である。胎土は青灰色で砂粒を含んでいる。10は口径10.7センチメートル，高さ10.3センチメートル。11は口径12.7センチメートル，高さ16.7センチメートル。

### C. 木製品（第7・8・9図，図版11・12）

検出された主な木製品は農工具として，三叉鍬，鋤・竖杵・横槌がありその他に槌の子・船形・杭・木靴・鞍・台状木製品などがある。

**竖杵**（第7図1～4，図版12—5～6） 広葉樹の幹ないし枝からつくり，両端を太くし，中央の握部を細く削りこんだものである。身部から握部の削りこみの傾斜がゆるいものと急なものがある。いずれも身部は樹皮をはいだままで加工していない。端は凸面をなし使用痕が認められる。3は身部周側部に使用痕が認められ，横槌の役割をはたした可能性がある。1は現存長39.1センチメートル，最大径8.3センチメートルある。

**横槌**（きぬた）（第7図5・6・7，図版11—7） 柱状の身部と棒状の柄部とからなる。身部と柄部との境は斜面をなし，身部を太く削りのこす。柄部はいずれも欠失している。使用痕跡が身部の用側面にみられる。広葉樹の芯持材である。5は現在長15.5



第7図 木製品実測図（その1）

センチメートル，最大径11.7センチメートル。6は現在長14.3センチメートル，最大径7.3センチメートル。7は現存長16.8センチメートル，最大径11.7センチメートルある。

**槌の子**（第7図9・10，図版11—6） 自然木を短く切断し，中央部を削りこんで細くしてつくったもので，むしろ織りの重しである。広葉樹の枝ないしは細い幹から作製している。削りこまない太い部分も削って表面を調整しているが，なかには樹皮をとどめたものもある。広葉樹の芯持材である。9は長さ13.1センチメートル，最大径8.4センチメートル。10は表面の腐食が著しいが，現存長11.5センチメートル，最大径5.1センチメートルある。

**織器部材**（第7図9，図版12—4） 棒状の材の両端を削りこんで端部を太く削り残し，他は削って板状にしたものである。榿の芯持材である。一端が欠失しているが，織器の一部と考えられる。現存長32.9センチメートル，板状部の最大幅4.0センチメートル，厚さ1.8センチメートルある。

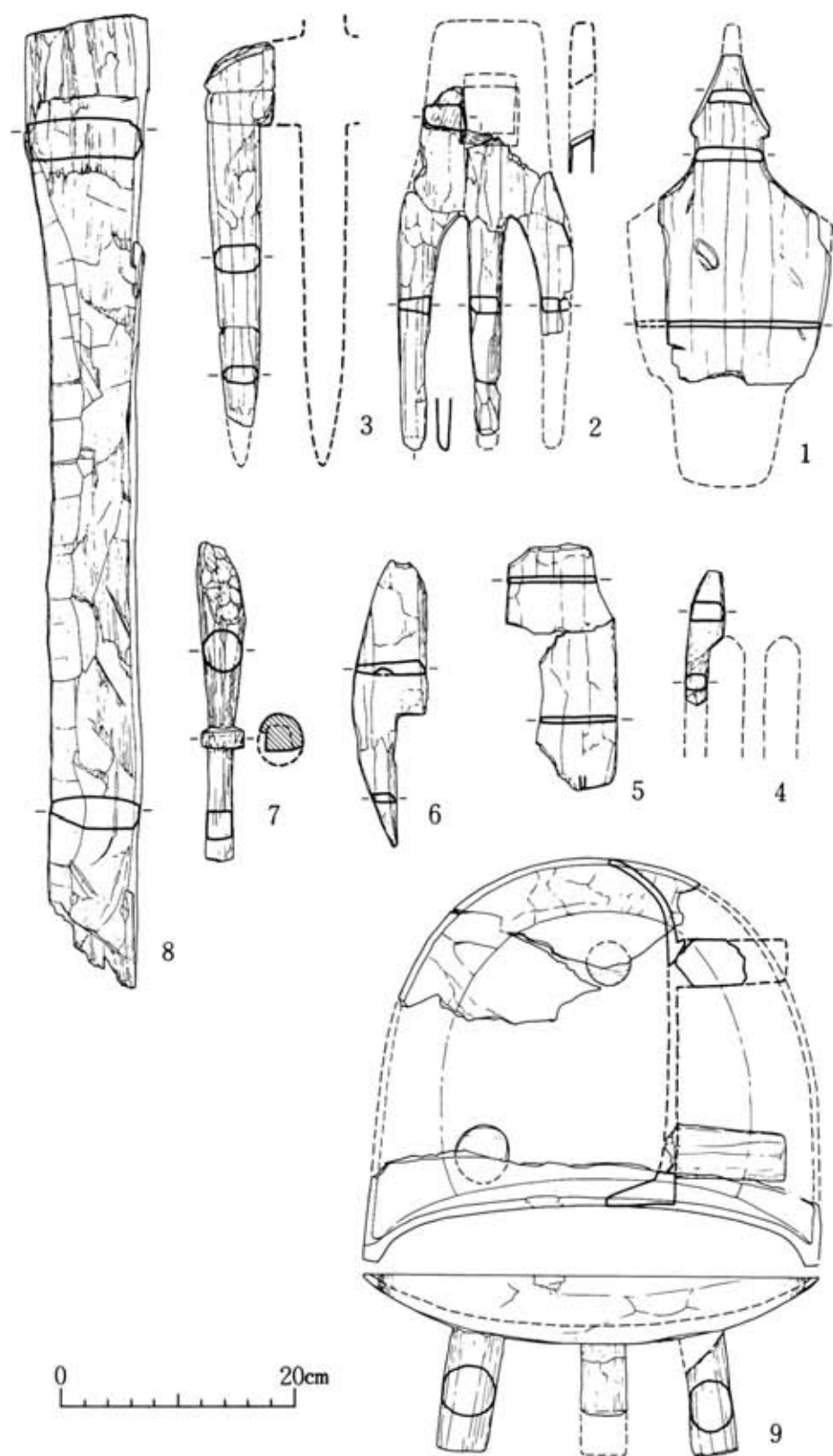
**木靴**（第7図13，図版11—3） 広葉樹の厚い板材を靴状に加工したものである。靴先の上部は欠失しているが，足に固定するために紐を通した穴が両側にみられる。底面はかなり磨滅している。底部上面はゆるやかな凹面をなし磨滅痕跡がみられる。長さ外側で27.6センチメートル，内側で22.5センチメートル。最大幅外側で12.2センチメートル，内側で10.1センチメートルある。

**台状木製品**（第7図14・15，図版11—5） 広葉樹の幹の芯をつかって平面形がほぼ正方形の台状に作製している。下面は削られて上面に貫通する方形の孔がある。面はかなり腐食しているが手斧の切先の痕跡がみられる。棒状のものが軸になるものの台であろう。これに似た例は静岡県下曾我遺跡にみられる。14は一辺20.5センチメートル，高さ7.8センチメートル。15は一辺<sup>注8</sup>22.6センチメートル，現存高12.8センチメートルある。

**杭**（第7図11・12） 枝ないし，細い幹の先端をとがらしたもので，樹皮がそのまま残っているものが多い。堰の打ち込み杭ないし，堰の組み材として使用されたものであろう。長さは0.5～1.5メートルある。堰から多量に出土している。

**着柄鋤**（第8図1，図版12—1） 身と柄とが別個になる鋤で，その形状がナスビの縦断面に似ており，起耕部分である刃着装部と柄をとりつける基部からなっている。刃部は鉄製の刃先をとりつけるための部分を造り出している。基部の突起下の着柄部は磨滅している。榿材とみられ，木取りは板目材に近いものから行っている。現存長28.2センチメートル，最大幅（復原）17.8センチメートルある。

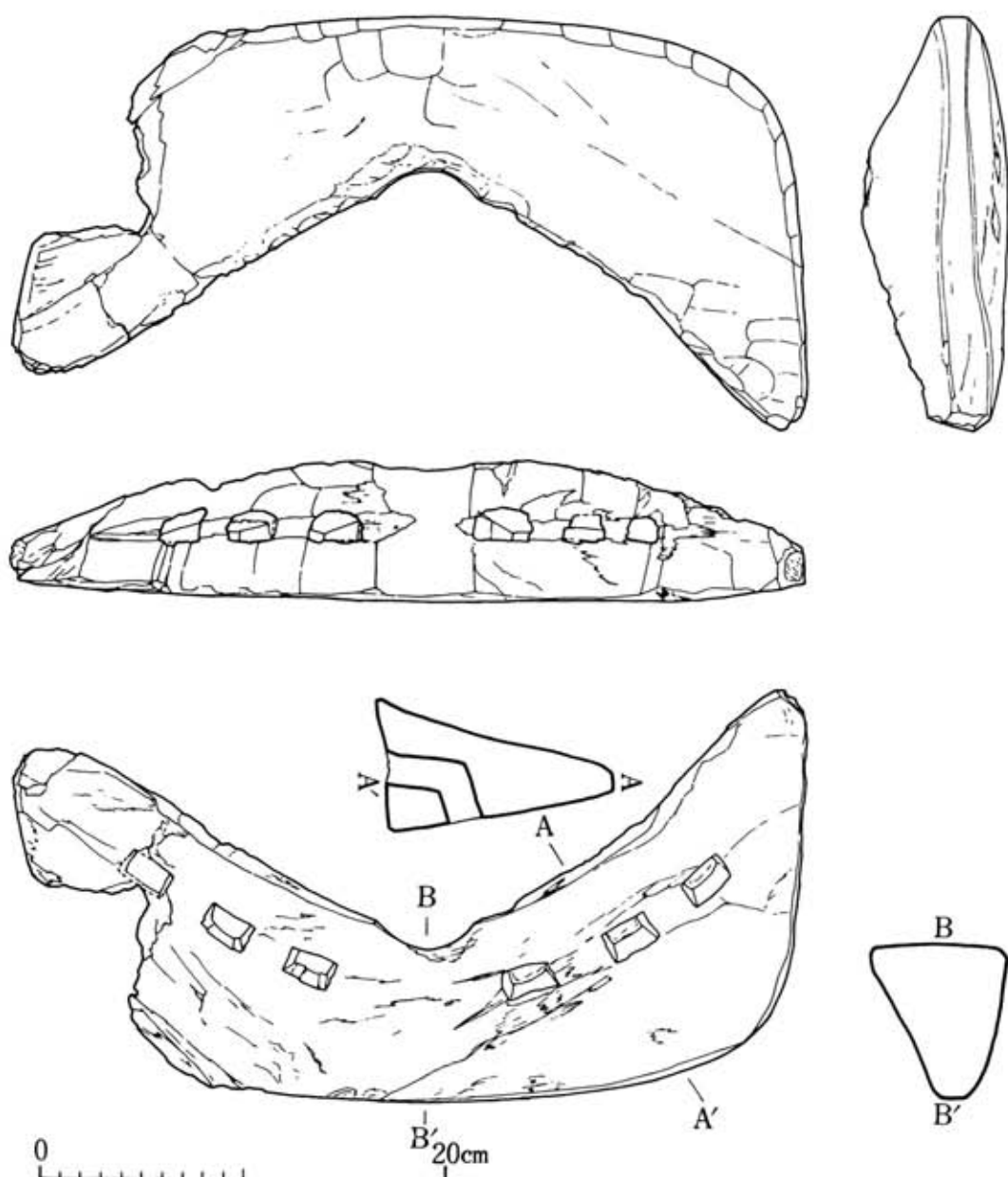
**三叉鍬**（第8図4・6，図版12—3左・中） 歯部の断片で原形が不明であるが，2



第8図 木製品実測図

種類ある。ひとつ（第8図6）は卵形をなしその先端を三叉にしたもので、歯部が板状をなす。他のひとつは、歯部が角の棒状をなし、基部から歯にかけて肩をもつ形態である。ともに樫材で柾目に近い木取りをしている。4は現存長11.6センチメートル、6は現存長24.4センチメートルある。

フォーク形農具（第8図3，図版12—3右） 歯部の断片で原形は不明であるが、厚手の基部から串状の長い歯を造り出したもので



第9図 木製鞍橋実測図

ある。歯は断面楕円形の棒状で、先端に向って尖っている。復原すると三本くらいの歯が考えられる。残存長32.8cm、歯部最大径 4.4センチメートルある。材は櫟で柾目板に近いものを加工している。

**用途不明農具**（第8図5） 全体に偏平な薄板で一部に削りがある。櫟材であるが、鋤状の農具になるのか、木目に平行した刃をもつえぶり形農具になるか不明である。現存長21.0センチメートル、最大幅 9.5センチメートル、厚さ 0.5センチメートルある。

**用途不明木製品**（第8図7、図版12—4右） 櫟の芯持材で基部を方形に、身部を円形に、先にゆくほど太く削り出している。身部と基部の間は鐔状に突起を造り出している。敲打に使用したもののようであるが、用途は不明である。現存長27.4センチメートル、身部最大径 3.9センチメートルある。この種のものは久蘇遺跡<sup>注9</sup>の調査の際も一点出土している。

**加工途中木製品**（第8図8） 木目にそって割り出した板を一方向から手斧で加工途中のものであるが、最終的にどのような木製品になるかは不明である。現存長83.9センチメートルある。

**鞍橋**（第9図、図版11—1） 一部欠損しているが原形がはっきりする鞍橋である。馬背に対して内側面が直立するところから前輪と思われるもので、上端は曲線をえがきながら肩をもち、下端は低三角形をなし、馬の背骨の触れる頂点（州浜）は削り出ている。内側から下端に向けて小穴を六カ所穿っている。前輪と連絡するために据木の一端をさしこんだか、皮紐のようなものを通したものであろう。全面には朱塗りされており、一部に黒漆の痕跡があり、朱は黒漆の下塗りであろう。材は広葉樹（櫟?）で板目材である。鞍橋の最大幅38.8センチメートル、高さ20.5センチメートル、上端厚さ 1.4センチメートル、下端最大幅 6.7センチメートルある。例品の出土例は少なく、山形県鳴鶴遺跡<sup>注10</sup>・大阪府陵南遺跡<sup>注11</sup>で発見されているに過ぎない。本例は他の2例の鞍橋上端の縁が半円に近い孤をなすのに比べて、肩の張った形をとっている。

#### D. 土製品・石製品（第10・12図、図版14）

土製品と石製品のほとんどが祭祀具である。主な遺物としては鏡・器台・高坏・埴・勾玉などがある。

**鏡形土製品**（第12図1～6、図版14—7） 手づくねで円盤状の土製品をつくりその中央部をつまみ出して鈕にしたものである。鈕の部分に穿孔のあるもの1～4と、ないもの（5～6）がある。孔のあるものは胎土が茶褐色、孔のないものは暗褐色で作りも粗雑である。いずれも胎土中に砂粒を含んでいる。1は最大径 4.0センチメートル。5は最大径 4.8センチメートルある。

器台形土製品（第12図8・9，図版14—1） 鼓形をなし上面がやや凹んでいる。手ずくねで，胎土は茶褐色で砂粒を含んでいる。8は高さ3.15センチメートル，径3.8センチメートル。9は高さ4.2センチメートル，径4.1センチメートルある。

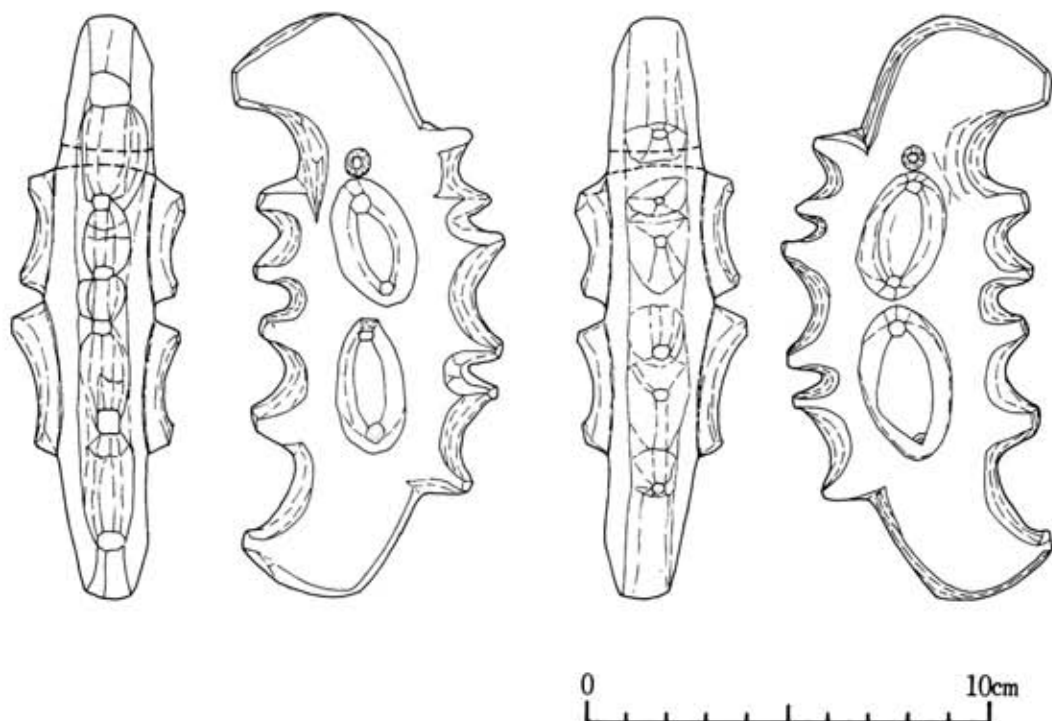
高坏形土製品（第12図10，図版14—1） 外へひらく裾部に，棒状の脚部のつく脚台に，内弯気味の坏部がのる形態である。胎土は茶褐色，砂粒を含む。

小坏（第12図11～16，図版14—2・3） 手ずくねで深いもの，浅いもの各種の形態がある。底は丸底，尖底である。いずれも茶褐色で，砂粒を含む。4は口径7.2センチメートル，高さ4.7センチメートルある。

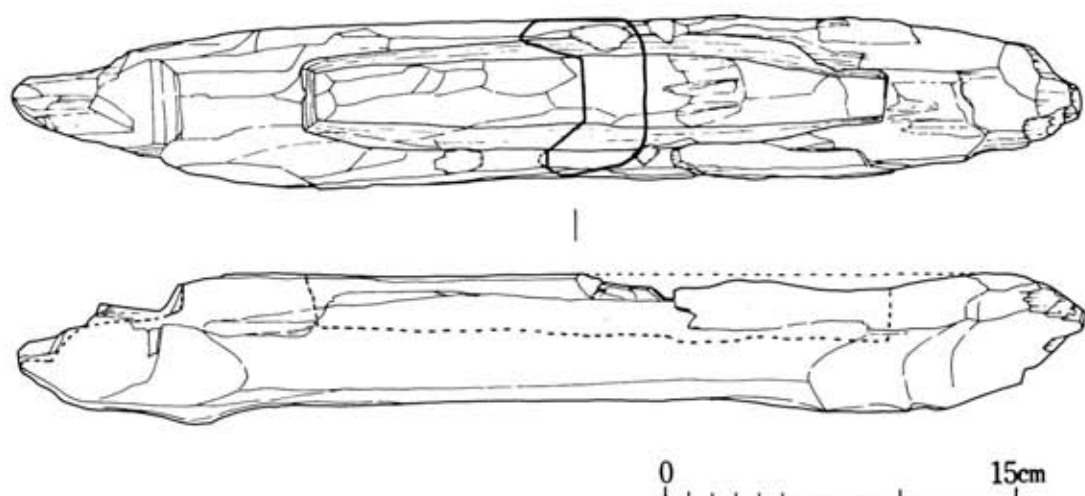
罎（第12図18・19・21，図版14—3・4） 丸い体部に短く外反する口縁部のつく形態である。21は底部付近をへら削りしている。いずれも灰茶色で砂粒を含む。21は口径6センチメートル，高さ8センチメートルある。

皮袋形土製品（第12図17，図版14—6） 皮袋形を呈する形態で口縁部に2孔一対の穴が2カ所ある。また肩部にへら先による列点文がある。胎土は暗灰色で砂粒を含む。口径約5センチメートル，高さ8.2センチメートルある。

勾玉形土製品（第12図20） 勾玉を形どった土製品である。表面に整形の際の面取りがある。頭部に一孔がある。胎土は茶褐色で砂粒を含む。



第10図 子持勾玉実測図



第11図 船形木製品

有孔円盤（第12図 7，図版14—7 右上） 滑石製で薄い円盤状の石に2孔をあけている。表面に研磨の際の擦痕がのこる。径3.5センチメートル，厚さ0.4センチメートル。  
 子持勾玉（第10図，図版13—6） 滑石製で，背部に3個，腹部2個，両側に各2個の子勾玉形がつく。全長14.4センチメートル，最大幅 6.2センチメートルの大型である。県下では鳥栖市<sup>注12</sup>柚比について2例目である。子持ちではないが大型の勾玉が基山町伊勢山遺跡<sup>注13</sup>から出土している。その他獣骨・魚骨・カキが出土している。獣・魚骨には火にあったものがある。

注1 「佐賀県史」「小城町史」

注2・3 柴元静雄 他

「土生・久蘇遺跡」佐賀県文化財調査報告書第25集

注4 志佐憚彦「竜王縄文遺跡調査概報」教育佐賀 昭和33年

注5 高島忠平「三日月町佐織の夜臼式土器」新郷土 319号 昭和50年

注6 木下之治 他「牟田辺遺跡」多久市教委 昭和49年

注7 「古照遺跡」松山市教育委員会

注8 国学院大学考古学資料室要覧「下曾我遺跡出土遺物」昭和48年

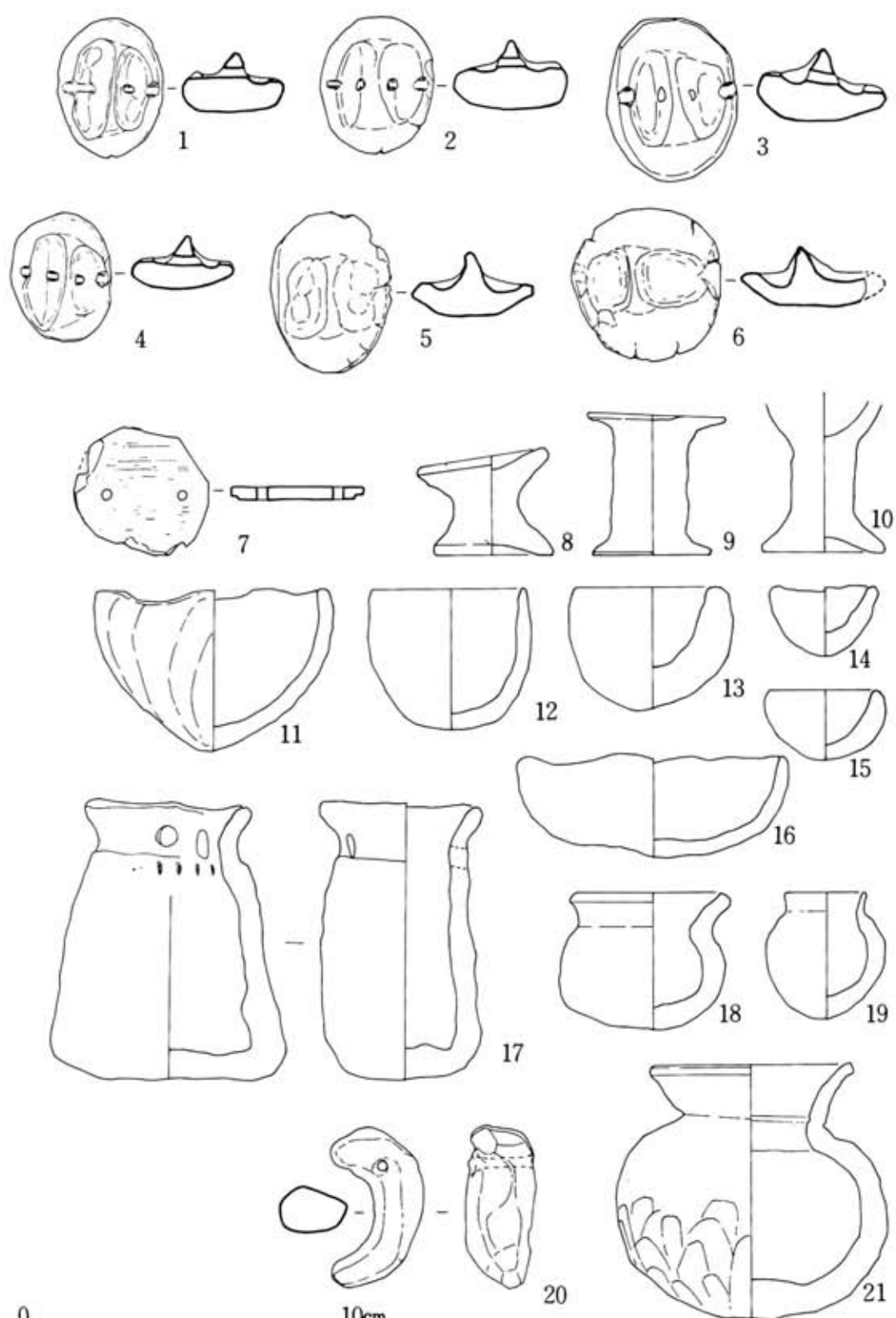
注9 「土生・久蘇遺跡」佐賀文化財調査報告書第25集

注10 「嶋遺跡」山形市史別巻 昭和43年

注11 「陵南遺跡現地説明会要旨」堺市教育委員会 昭和49年

注12 「鳥栖市史—Ⅳ古代」鳥栖市教育委員会 昭和48年

注13 「伊勢山遺跡」九州縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書 佐賀県教育委員会 昭45年



第12図 祭祀用土製品実測図

## 2. 平安時代の遺物

SE004井戸と小穴から出土したものである。

**土師器椀**（第6図12，図版13—3） ふんばった高い高台のある底部に内弯気味の口縁部がつく形態で，口縁端部がわずかに外反する。口縁部の底部に近い部分はヘラ削りをし，そのあと器面は内外面ともよくヘラ磨きをしている。胎土は茶褐色，砂粒を含む。口径15.0センチメートル，高さ3.3センチメートルある。ロクロによる成形とみられる。なお，口縁部下半の一部に「會俗」の針書きがあるが意味は不明である。

**須恵器坏**（第6図13・14，図版13—4・5） 平底に外反する口縁部のつく形態である。底部はヘラ切りのままで，口縁部下半はヘラ削りを行い，あとはロクロの回転によるナデである。胎土は灰色で砂粒を含む。14はSE004井戸，13はSE004井戸付近の小穴から出土している。14は口径13.0センチメートル，高さ3.6センチメートルある。

**箴（おさ）**（図版13—1） 竹製で，両端は木杵でおさえている。破損のため全体の大きさが不明であるが現存長18センチメートルある。竹部の幅（竹材の長さ）7.7センチメートル，木杵の長さ9.2センチメートル，幅1.05センチメートルである。竹部の両側に繊維痕があり，現在の竹とちがって糸であんでいたと考えられる。糸帯の間隔6.3センチメートルある。竹材は長さ7.7センチメートル，幅0.2センチメートル，厚さ約0.05センチメートルである。古代箴の出土品としては最初のものであろう。

**櫛**（図版13—2） 2個体分ある。ツゲ製で，背の部が直線的なものと，やや丸いものがある。歯数は1センチメートルあたり15本で，平城宮出土のものと大差のないほど精巧につくられている。現存長5.6センチメートル，幅3.9センチメートルある。<sup>注14</sup>

## 3. 弥生時代の遺物

沼状の遺構の底から出土している。

**木製盤**（第8図9，図版11—4） 平面が風字形をなす盤に丸い三足がつく形態である。広葉樹の柾目材を利用して製作している。復原長35センチメートル，幅39センチメートル，復原高15.2センチメートルある。同様の形態のものは，山形県鳴鶴遺跡<sup>注15</sup>から出土しているが古墳時代のものである。

**三叉鍬**（第8図2，図版12—2） 基部から三叉にわかれた三本の歯と柄をとりつける基部が一応残存しており，全体の形状が推察できる。歯部は角棒状をなす。基部には柄をさしこむ方形の孔が3分の1程残存している。材は榎で柾目に近い木取りをしている。現存長30.5センチメートル，最大幅15.2センチメートル。基部の厚さ2.3センチメートル，歯の長さ20センチメートル。破損後火にあってこげている。

## ま と め

今回の発掘調査は圃場整備事業施行に伴う緊急調査であり、かつ、発掘区が水路付設で、遺構が破壊される地域に限られたため、検出した遺構の性格を十分に明らかにすることはできなかった。しかし、今回の発掘地域を含めて国指定史跡土生遺跡を中心に、広大な遺跡が弥生時代～古墳時代～歴史時代にわたって存在することが明らかとなった。また、小範囲の発掘ではあったが、古墳時代の川跡と堰跡、平安時代の丸木の井戸など貴重な遺構を検出した。堰跡からは多量の土器・木製品などが出土し、なかでも木製鞍橋は出土品としては日本で3例目であり、古代乗馬の風習を考えるうえでまたひとつ重要な資料を得たといえる。また、同時に出土した土製及び石製の祭祀具は、古墳時代の祭祀の場としての川および堰を新たな知見として加え得た。なかでも子持勾玉は県下で2例目であると同時に福岡県沖の島例<sup>注16</sup>について大きく、日本最大級の子持勾玉である。

平安時代の丸木の井戸から出土した箴（おさ）は古代箴としては出土品として最初の発見である。残念ながら原形の全部をうかがい得ないが、古代織機技術を考える上で貴重な資料であろう。また同時に出土した土製の櫛は平城宮跡出土のものと比べて遜色なく精巧に製作されており、この地域の遺跡を残した人達の文化の高さをしめしている。それは土生遺跡をはじめ、小城・三日月地方は既述のような重要な遺跡が分布するところであり、原始・古代の佐賀平野において常に先進的役割をこの地方はにっていたといえることができる。とにかく今回の調査は小範囲ながら数々の重要な成果をあげることができた。これは今回の発掘調査に尽力を惜しまれなかった地元三日月町をはじめ、調査関係者の方々のひとかたならぬ御協力の成果だといえる。最後にこれらの方々に感謝の意を表しておきたい。

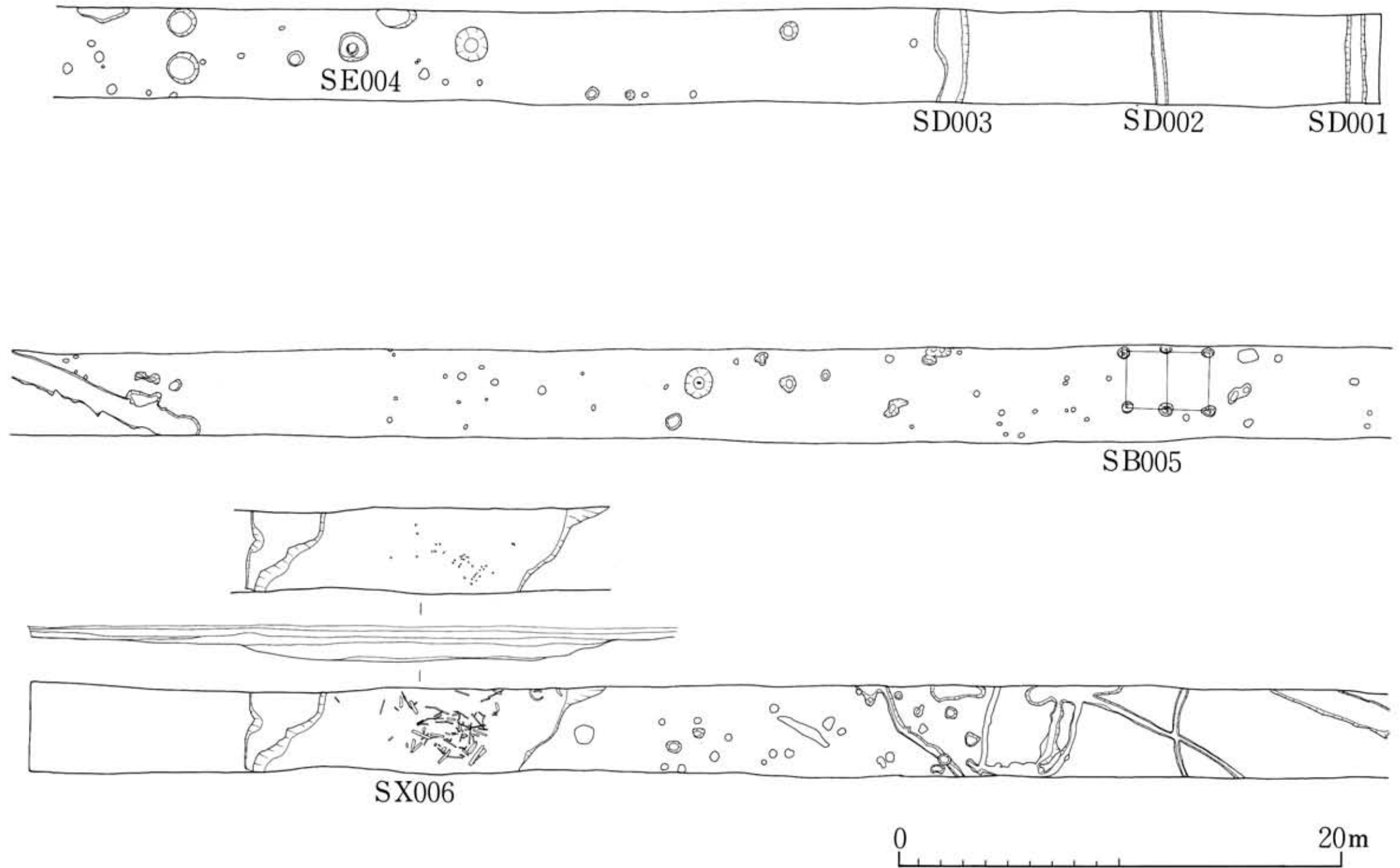
注14 「平城宮跡発掘調査報告Ⅱ」奈良国立文化財研究所 昭和37年

注15 「嶋遺跡」山形市史別巻 山形市教育委員会 昭和43年

注16 「沖の島」

4

図面1 石木遺跡A地区遺構配置図





石木遺跡発掘区全景

85.759.04-25



③ 750100-16



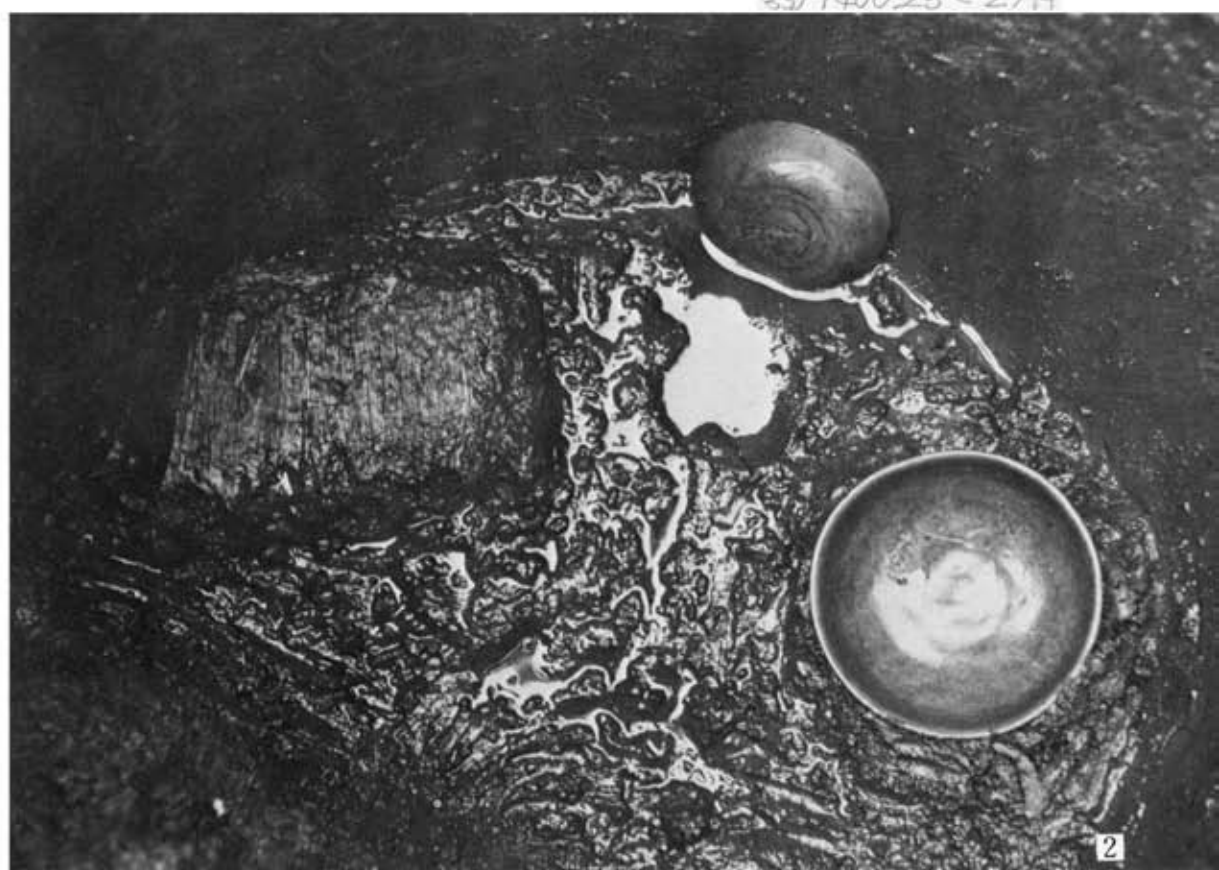
1. SB 005掘立柱建物(南から) 2. SB 005掘立柱建物(東から)

③ 750100-20



1

85740023-23A



2

1. SE 004井戸 2. SE 004井戸内部

85740023-11A



85750085-33



85750085-30



1. SD 001南北溝(南から) 2. SD 002南北溝(南から) 3. 斜め溝(南東から)



SX006井堰全景

750100-8



35750098-12



35750098-5

1. SX 006井堰(東から) 2. SX 006井堰(南から)



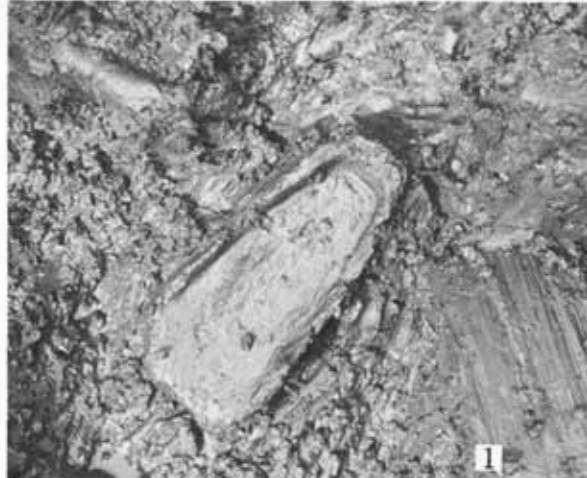
(35) 750096-26



1.007井堰遺物集積状況(南から) 2.左部分(南から)



(35) 750100-32



(35) 750075-8



(35) 750096-33



(35) 750101-9



(35) 750097-25



(35) 750103-33

1. SX 006井堰木靴出土状況 2. SX 006井堰土器・木器出土状況 3. SX 006組木の状況  
4. SE 004井戸箆(おき)出土状況 5. SX 006井堰縦杵及び杭出土状況 6. 盤(弥生)出土状況



2

㊦ 750202



1

㊦ 750196



4

㊦ 750187



3

㊦ 750290



6

㊦ 750195



5



8

㊦ 750198



7

㊦ 750197



10

㊦ 750221



9

㊦ 750190

土 師 器



④X5 750185



④X5 750199



④X5 750184

④X5 750269



④X5 750183

④X5 750266



④X5 750179



④X5 750279



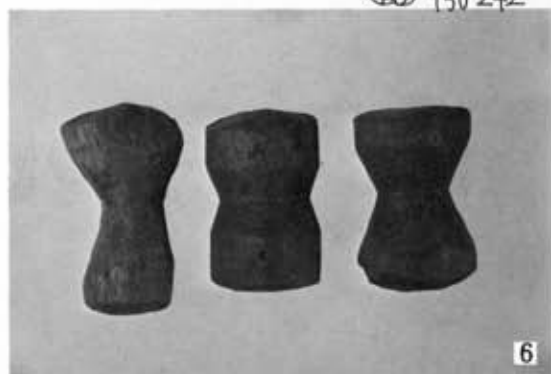
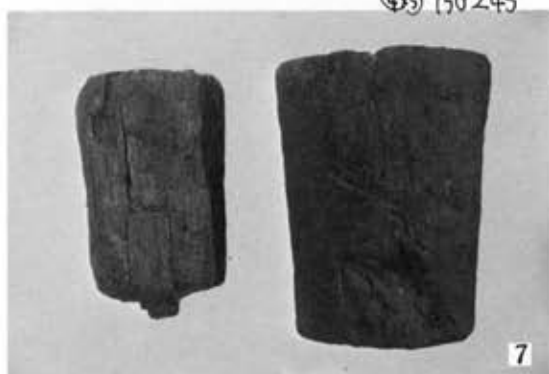
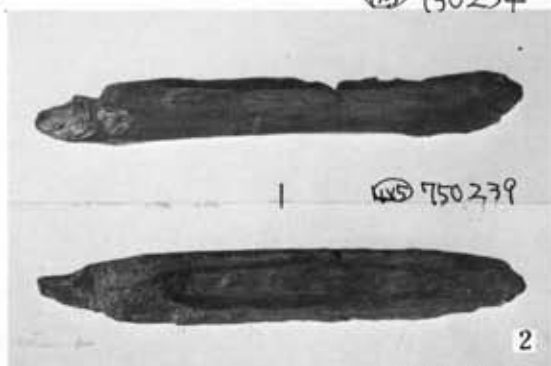
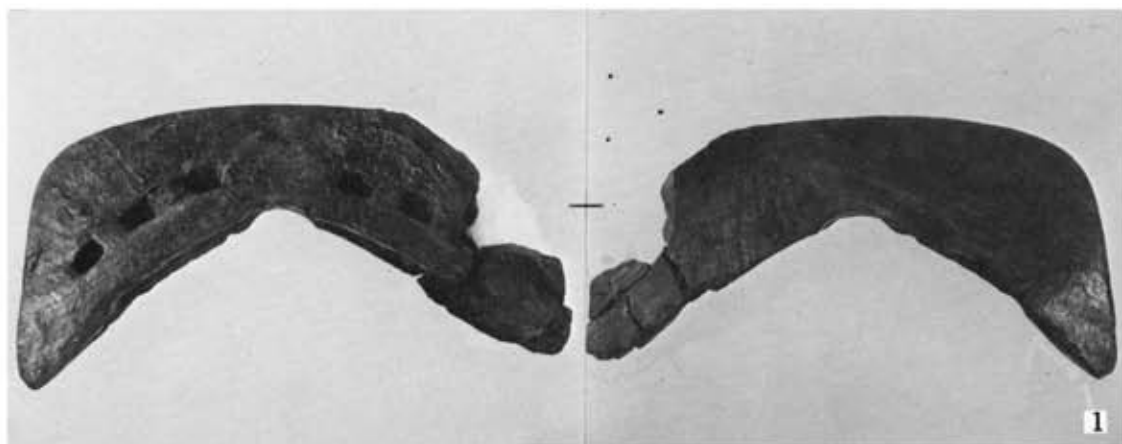
④X5 750182



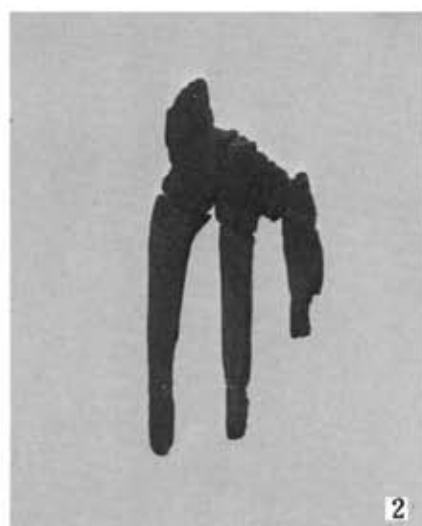
④X5 750270

④X5 750222

1～6・8須恵器 7.支脚



1.鞍 2.船形木製品 3.木靴 4.盤 5.台状木製品 6.槌の子 7.横槌



2

(4x5) 750251



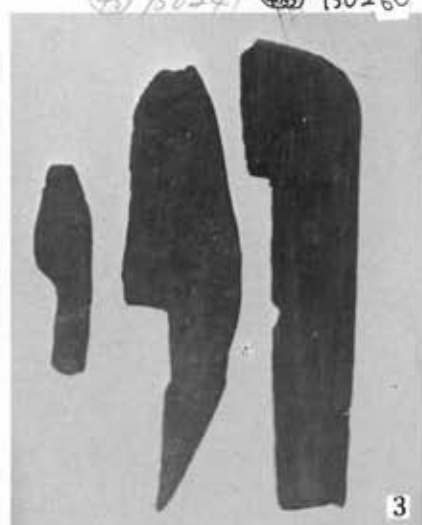
1

(4x5) 750241 (4x5) 750260



4

(4x5) 750252



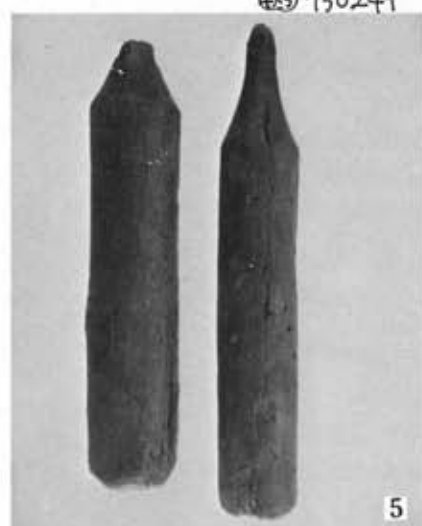
3

(4x5) 750249



6

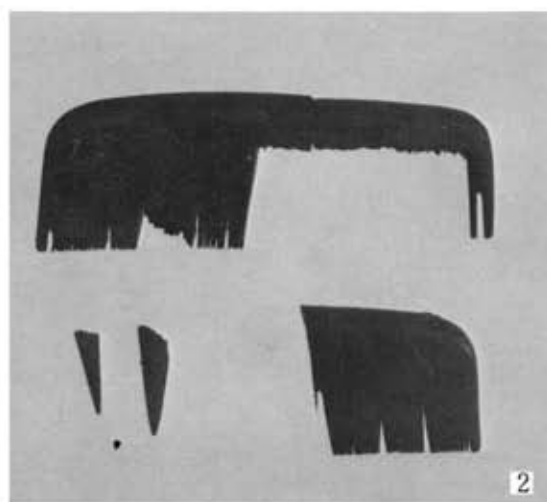
(4x5) 750248



5

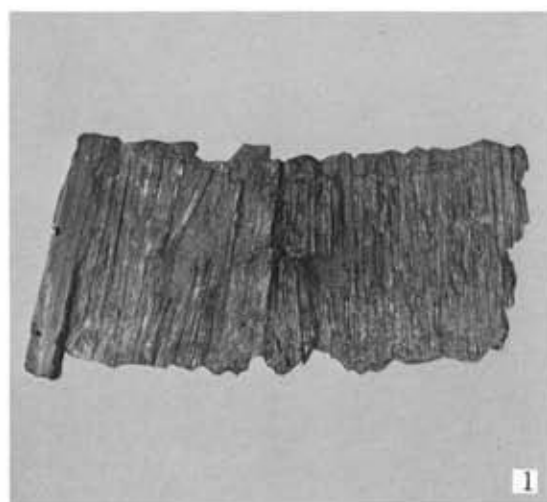
(4x5) 750261

1. 着柄鋤 2. 三叉鋤 3. 左三叉鋤 中三叉鋤 右鋤 (フォーク) 4. 左織器部分 右不明木製品 5. 竖杵 6. 竖杵



2

4x5 750234



1



4

4x5 750208



5

4x5 750210



3

4x5 750212



4x5 750257



4x5 750232



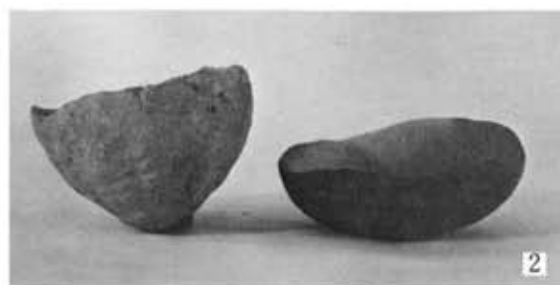
4x5 750255



6

4x5 750258

1. SE 003出土篋 2.同櫛 3. 4・5 同土器 6. 子持勾玉



2



1

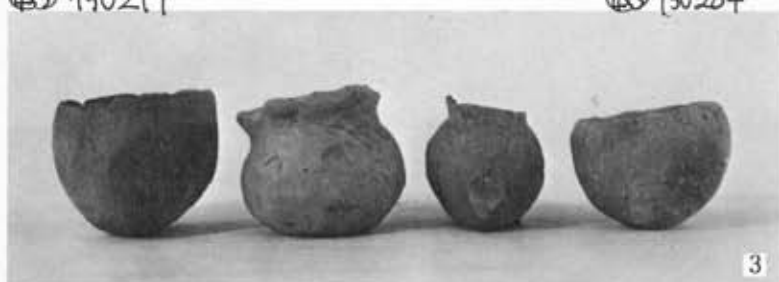
④x⑤ 750217

④x⑤ 750234



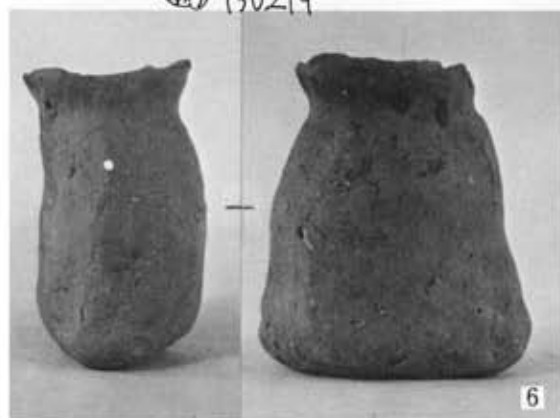
4

④x⑤ 750219



3

④x⑤ 750220



6

④x⑤ 750276

④x⑤ 750277

④x⑤ 750271



5

④x⑤ 750286

土製及び石製祭祀品

1. 高 杯
2. 鉢・皿
3. 埴
4. 小 杯
5. 壺
6. 皮 袋
7. 鏡(上右端石製)



7

④x⑤ 750259

## あ と が き

1. 本報告書は昭和49年度圃場整備に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 本報告書の作製は県教育委員会文化課文化財調査係で行った。編集は高島忠平、執筆は高島・樋渡敏暲が分担した。
3. 本報告書作製にあたっては、奈良国立文化財研究所の西村康・黒崎直・管原正明・毛利俊彦から絶大な御協力を得た。
4. 実測図トレースには文化財調査係田平徳栄・服部二郎が協力した。
5. 発掘調査にあたっては、熊本大学の白木原和美教授をはじめ、高瀬哲朗・渡辺一雄・田中寿夫、その他地元三日月町の方々から御協力を得た。

佐賀県文化財調査報告書

第 35 集

### 石 木 遺 跡

調 査 報 告

昭 和 51 年 3 月

発行 / 佐賀県教育委員会

佐賀市城内一丁目

印刷 / 佐賀県印刷局

